

## 正確な記録を残して未来の災害対策に

インタビュー：羽根田治（長野県山岳遭難防止対策検討会委員）

—御嶽山噴火災害では、58名の尊い命が失われ、今なお5名の方の行方がわかっておりません。ご遺族や被災された方、ご家族の方への知事の思いを聞かせてください。

お亡くなりになられた方々のご冥福を改めてお祈りいたします。また、負傷された方など、被災されたすべての皆様に心からお見舞いを申し上げます。

一般的な災害では、ライフラインや道路の復旧などを中心とした、暮らしを平常の形に戻すための総合的な対策を行います。御嶽山の場合は、「人を助ける」、その一点集中の災害対策であり、人命救助と行方不明者の捜索に絞って対応しました。そういう意味で、ひとりでも多くの方を救出し、行方不明になられた方もすべて発見しなければいけないという強い思いがありました。警察・消防・自衛隊の3隊の皆さんにも、大変過酷な環境のなかで、強い思いを持って救助・救出にあたっていただけました。

この噴火災害の救助・救出活動はかなりの長期間となりましたが、ご遺族と行方不明者のご家族への対応は丁寧にさせていただいたと考えております。「今、なにが行われているのか」という情報も、できる限り共有させていただき、捜索活動に取り組みました。至らないところもあったかもしれませんが、そうしたコミュニケーションの部分では、かなり意識・配慮をして対応いたしました。

—この噴火災害で救助・救出活動を指揮した知事の立場から、この災害対応について総括をお願いします。

御嶽山の噴火災害は、対応が非常に難しいことがたくさんありました。たとえば、どなたが入山されているのか、

行方不明者がいったい何名なのか、当初はそれがわからなかったこと。また、噴火口に近い場所での救助・救出活動となったため、警察・消防・自衛隊の皆さんの二次災害を絶対に起こしてはならないということなどです。

そうした状況のなか、関係機関相互の連携・協力をしっかりとっていきながら、人命救助あるいは行方不明者の捜索に全力で取り組みました。長野県単独で対応できる事態ではなく、国の非常災害対策本部をはじめとする関係機関が総力を挙げて救助・救出にあたったという意味で、県の災害対策本部長としての私の役割・責任には非常に重いものがありました。

—噴火の第一報を聞いたとき、どのように受け止められたのでしょうか。

あの日、私は日本ジオパーク全国大会に出席するため、伊那市にいました。「御嶽山が噴火した」という一報を聞いたとき、まず最悪の時間帯に噴火してしまったなと思いました。とても天気の良い土曜日の、ちょうど昼食ときということで、季節的・時刻的に登山には最適のタイミングでしたから、情報をしっかりと把握して対応しなければいけないなと感じました。

—御嶽山の災害対応では、警察・消防・自衛隊の連携が素晴らしかったと、各隊に関わった者から聞いています。この3隊の連携が円滑にできるように、知事はどのような配慮をしたのでしょうか。

今回の御嶽山の噴火災害対策については、救助・救出に特化したものだったと言っても過言ではありません。それ



災害対策本部長として救助・救出活動の陣頭指揮をとる阿部知事



玉滝村を訪れた山谷内閣府特命担当大臣（防災）と

を進めていくうえでは、関係機関が同じ目的意識を持ち、情報を共有して常に意思疎通を図りながら連携をとっていくことが最も重要です。そこで救助・救出に携わる3隊の指揮官と知事室で頻りに意見交換を行い、方向性の確認をさせていただきましたし、私も自分の考えを率直に伝えました。平常時には各隊の指揮命令系統はそれぞれ違いますが、災害対策という点から、県の災害対策本部として一体となって皆さんに動いていただけたと思っています。

また、それぞれの機関には、得意な分野とそうでない分野があります。当初は行方不明者が多く、対応に苦慮しましたが、警察の情報力によって被災された方を確定することができました。救助・救出を専門とする消防には、現場で志高く取り組んでいただきました。そして標高の高い山での救助・救出活動には、自衛隊のヘリコプターが非常に大きな力を発揮してくれましたが、自衛隊の皆さんの作戦立案能力はとても高いものでありました。県の災害対策本部としても、関係機関に連携をしっかりとってもらよう努力しましたが、3隊それぞれの強み、持ち味を出し合って進めていただくことができ、大変感謝しています。

——この噴火災害では、国の非常災害対策本部が設置され、長野県庁には国の現地対策本部が設置されました。知事の立場で、国の非常災害対策本部や現地対策本部との連携はどのように考えたのでしょうか。

県庁内に現地対策本部をつくっていただき、当時の松本大臣政務官をはじめ関係者の方がずっと現地対策本部に常駐されていました。そういう方々とも定期的に意思疎通させていただくことができました。そのおかげで、国に対してお願いしたことについては、非常に早く、かつ円滑に対応していただけたと思っています。

——救助・救出活動の終了をどのような思いで決断されたのでしょうか。

この救助・救出活動は、すべての方を早く発見しなければいけないという思いと、救助にあたっている隊員が毎日無事に下山してもらいたいという思い、この二つをもって取り組みました。活動は非常に過酷な環境下で行われ、季節が冬に向かうなかで、状況は日増しに厳しくなっていました。最後は、リスクが増大するなかでこれ以上搜索を続けるのは難しいということで判断しました。搜索終了は、本当につらい、まさに断腸の思いでの決断でした。

——翌年には異例ともいえる再搜索が行われました。前年に搜索を終了した時点では、再搜索のことを念頭に置いていましたか？

翌年に火山の状況がどうなっているのかわからないので、明確に「再搜索をする」という判断をしていたわけではありません。再搜索を行うには、多くの皆さんの協力が



再搜索終了の記者会見で状況を説明

必要ですし、自衛隊にもご協力いただかなければならないと考えていたからです。最終的には関係機関の皆さんの思いも強く、翌年、再搜索を行うことができました。自衛隊にもある意味で例外的な対応をしていただきました。

再搜索においても、日々、3隊の皆さんと対話しながら計画的な搜索を順次進めていきました。私からは、「可能性がある場所は隔々まで搜索してほしい」と伝えました。後から振り返って、「あれもやっておけばよかった」という悔いが残らないようにしたいという思いがありましたので。また、固まった火山灰の下を搜索するため、前年とは違う意味で過酷といえる環境下での対応となりました。そんななかでも、関係機関の皆さんには、「立ち入りが難しい危険箇所以外はすべて搜索した」という段階まで、しっかりやり切っていただきました。

——噴火の翌年に国が活動火山対策特別措置法を改正するなど、御嶽山の噴火は火山防災対策の転換点になりました。県内および隣接に10の活火山を有する長野県の知事として、火山防災対策への思いを教えてください。

御嶽山の噴火災害を受けて、御嶽山の山麓に名古屋大学の研究施設を置いてもらうことができました。また、活動火山対策特別措置法の改正も含め、国にもいろいろな対応をしていただき、火山防災対策は一步前進したと思っています。

ただ、日本には火山の専門家がまだまだ少なく、火山を抱えている市町村も規模が小さいところが多いというのが現状です。県としての取り組みをもっと強化していかなければいけません。人材の確保を含め、国における総合的な対応が必要だと思います。この噴火災害では、気象庁をはじめ国の機関にも大変なご支援・ご協力をいただきましたが、国レベルでの観測や研究を、さらに充実・強化させていっていただきたいと思っています。

——最後に、火山を有する全国の自治体へ、知事から伝えたい思いや教訓がありましたら教えてください。

地震や火山噴火といった自然災害は、いつ起きるかわかりません。東日本大震災のような規模の災害は、過去にも同じような災害が起きている可能性が高いので、これまでの歴史を振り返って災害対策を考えるとともに、記録をしっかりとして残しておくことが重要です。

また、今回の噴火災害では、関係機関の皆さんに過酷な環境のなかで士気高く救助・救出活動にあっていただきましたが、そのためには防災関係機関同士が常日頃から顔

の見える信頼協力関係をつくっておくことが重要だと、改めて感じました。

御嶽山の噴火以降、木曽地域の観光客は激減し、地域の産業・経済に深刻な影響が生じています。しかし、これからも木曽地域は火山と共生していかなければなりません。観光をはじめ、さまざまな恵みをもたらすと同時に、恐ろしい一面を有する火山とどう向き合っていくべきか、火山を抱える地域の共通の課題であると思います。

## 原久仁男木曽町長インタビュー

# 安心して登っていただける山になるように

インタビュー：佐々木惣（山と溪谷社山岳図書出版部）

——噴火当手を振り返って、今お考えのこと、感じられていることを教えてください。

平成26年の夏は天気が悪く、紅葉も遅れていました。9月27日は土曜日で紅葉も真っ盛り、そしていい天気でした。そのお昼時という、登山者にとっていちばん楽しい時間に噴火してしまいました。それは本当に悲しい一言です。

ご遺族の皆さんともお話しさせていただきましたが、お気持ちに寄り添いながら私たちも今まで取り組んできたつもりです。安全対策をしっかりととりながら、安心して登っていただける山になった、と胸を張って言えるようになってほしいと思っています。

——救助・救出活動時に木曽町が果たした役割と、印象に残っていることを教えてください。

山の上の災害なので、台風や土砂崩れなど人が暮らしている場所で発生した災害とは状況が異なります。そのなかで王滝村が救助活動の基地の役割を果たし、木曽町は結果を待ちわびているご家族の皆さんの待機場所と、見つかった皆さんとの対面の場所になりました。

噴火してから何日間かは、救助・救出の状況がわからなかったですし、待っているご家族の皆さんに町から情報を提供することもできませんでした。警察や国交省など現場とつないでくれる方はいらっしゃったのですが、なかなか情報が入ってきません。そうするうちに国の災害対策本部や知事も来ていただくなかで、救助・救出の状況をできるだけスムーズにご家族の皆さんへ伝えて、お気持ちを鎮めていただけるようにしたい、と伝えましたところ、その後

は情報が伝わってくるようになりました。

また、いまでこそ名古屋大学の先生方に火山についてのさまざまな情報や知識を教えてもらえるようになりましたが、噴火前はそのような状況にはなかったです。私自身も火山に対する知識を持ち合わせていませんでした。ハザードマップもあるにはありましたが、このような災害を想定していませんでした。そういうところがいちばん欠けていた部分でした。

——想定外の事態が発生したとき、どのように対応することを心がけていらっしゃいましたか？

最優先に考えていたのは、登山者の皆さんに安全に帰宅していただくことでした。噴火当日、夜までかけて下山されて、その夜は木曽町で施設を開放して泊まっていただきました。次の日、入院された方もいらっしゃいましたが、電車などでそれぞれご帰宅されました。あとは救助・救出



再捜索の現地指揮本部を激励に訪れた原町長

活動の状況を見ながら対応できました。

大変だったのはマスコミの対応ですね。噴火して数日は役場のなかへ入ってきて職員に直接取材するマスコミもあったので、ものすごく混乱しました。報道対応の時間を決め、また駐車場も住民の方々との分けをして、2～3日経つと落ち着きました。このような対応も想定外でしたが、流れのなかで対応できるようになりました。

—噴火前と噴火後で変化された点はありますか？

前と後という比較はまだできません。噴火前の御嶽山に完全に戻った状況ではありませんので。

御嶽山は信仰の山です。登山道の整備も山小屋も、信仰の山という歴史のなかで考えているところが大きかったのですが、近年は信者の方以外の登山者が増加する傾向がありました。そのような意味で、山との向き合い方も変わってきています。山小屋の再建や避難施設の整備など、噴火前は町で予算をもつことや事業を展開することはほとんどありませんでしたが、現在は山に関係するさまざまな事業に取り組んでいます。

—町として取り組んできたことと、これから取り組まれることを教えてください。

ハード面で取り組みましたのは、登山道と避難用シェルターの整備です。山小屋も石室山荘はアラミド繊維という防弾チョッキなどに使われる素材で屋根を補強し、噴石が直撃しても貫通しないようにしました。そして二ノ池山荘(旧二ノ池本館)は新しく建て替えました。山頂の御嶽神社の祈禱所の屋根と壁の補強も、町が費用を負担しました。

ソフト面では、山小屋に登山指導的な役割を担ってい

ただくことになりました。登山者に対していろいろなアドバイスをしていただいたり、常時2名体制でパトロール隊を組んでいただくことをお願いしています。これは県のほうからも支援をいただいております。

これから取り組む部分では、ビジターセンターがあります。火山の噴火が及ぼすことを、より多くの方に伝えられるように、情報発信、情報提供の施設として麓に整備していく予定です。

たとえば火山の凄まじさがわかるような、噴石が当たって曲ってしまった階段の手すりや、頭だけ飛ばされた石像などを展示したり、あるいはご遺族の皆さんから要望のあった遺品の展示や、無事に下山された方の経験談を音声で聞かれるようにするなど。ビジターセンターの役割は、火山が噴火するとどうなるかということを知ってもらう場所、火山を学ぶことができる場所と考えています。

また県が中心になって御嶽山火山マイスター制度を立ち上げていただいたので、マイスターの皆さんの活動をいかに活発にやっていただくか、町としてどこまでお手伝いできるか、ということがあります。マイスター制度はそれぞれの方が自主的に活動されるもので、個人個人によって差はありますが、地域の皆さんや登山者、また観光に来られた方々に伝道的な役割で活動していただけるのがいちばん良いのでは、と思います。

そしてマイスターや火山防災協議会、町などが主体となって1年に最低1回は学習会を開催しながら、町民の皆さんにも火山に対する理解を深めていただき、今回の災害を風化させない状況をつくっていかねばなりません。

## 瀬戸普王滝村長インタビュー

# 正しく知って、正しく恐れる

インタビュー：佐々木惣(山と溪谷社山岳図書出版部)

—噴火で犠牲になられた方やご遺族、被災された方々への思いを聞かせてください。

犠牲になられた方々のご冥福を改めてお祈りいたします。被災された方で回復された方もいらっしゃると思いますが、回復途上の方もいらっしゃると思います。そのような方々のお気持ちはまだ当時のままだと思っています。ご遺族の皆様も時間が止まったままだと思っています。皆様に心からお悔やみ申しますとともに、お気持ちの癒えないところに

ついてはご回復されますことを毎日祈っております。

—噴火当時の王滝村はどのような状況でしたか？

当時の王滝村の人口は850人くらい。小さな村で財政的にも汲々としているため、<sup>ばんじやく</sup>磐石とはいえなかったかもしれませんが、できる得限りの安全対策は間違いなくしてきておりました。平成19年にも噴火がありましたが、県にお願いしたところ毎年予算をつけていただき、火山ガスの検知器、スピーカー、ヘルメット、懐中電灯など可能な限



再捜索・消防隊解散式で謝辞を述べる瀬戸村長

りの手当てをして備えていたのです。今回の噴火でもそれらを使って避難していただき、私たちもそこまではできましたが、それ以上のことは思いつかなかったです。まさか、これほどまでの犠牲者がでることになるとは……本当にショックでした。

小さな村ではご家族の対応が難しかったため、かつて木曾地方事務所長を務めていた県総務部長の太田寛さん（現・長野県副知事）に相談したところ、ご遺族の対応は木曾町にお願いできるようになりました。王滝村は救助・救出活動の最前線として特化することになったのです。

噴火の前に南木曾町で発生した土石流災害の際、町村と県はどのように連絡を取り合うか、その形はできていました。それにのっかってアドバイスをいただきながら、警察、消防、自衛隊と県のほうでまとめてもらいました。

——救助・救出活動時を振り返って、いちばん大変だったことを教えてください。

大変だったことといえば、やはり犠牲者の数が日に日に増えていったことです。王滝村で人が亡くなられた災害発生は昭和59年の長野県西部地震以来でしたので。明けても暮れても、ひとりでも多くの方が見つかってほしい、その思いだけでした。山があつての私たちです。何か悪いことをしたのだろうか？ 罰があつたのか？ と毎日自問していました。

マスコミの対応も大変でした。あまりにも大変だったので、担当をひとり決めて、対応はその担当者に任せることにしました。質問はまとめて担当者にしていただいて、それから答えましょう、とすることで、ある程度スムーズになりましたが。

——村長ご自身のなかで、噴火前と噴火後で山との向き合い方で変化したところはありますか？

変化はないです。ただ、山に対する思いは変わらないを得ませんでした。

——どのように変わりましたか？

噴火の前は、火山の観測について村でできる限りのことしかできなかったのです。しかし、噴火を契機に国や県が動き、日本でも有数の観測体制が整いました。それこそ最新の設備で整えてもらいました。

それをいかに有意義に使っていくか、がカギです。故障したらそれでストップするのではなく、後世にわたるまで維持していかなければなりません。県が名古屋大学の研究施設を山麓に作ってくれました。これは私たちの意見を県も名古屋大学も理解してくれた、ということです。

このような思いが輪となって広がっていくことで、地域の人たちの山に対する思いや、火山とはどういうものなのか次世代に伝わり、それが未来につながっていけば、なによりも変わっていくと思うのです。

——今後、安心して登山をしてもらうために村として取り組んでいることを教えてください。

観測データをどう読み取って、村につなげるか、登山者につなげるか。その流れをマニュアル化することを検討しています。

そして村で考えているビジターセンター。田の原に火山について教えることができる者を常駐させられるようになればと考えています。できれば田の原から登る登山者は全員そこを通るような施設にしたいですね。平成19年の噴火以降、登山道には噴火警戒レベルのチラシを置くなど、火山であることを自覚してもらえるようにしてきましたが、なかなか認識してもらえませんでした。それは仕方なかったかもしれませんが、ビジターセンターに人を配置し、そこを通る登山者に声をかけたり、火山であることを前もって認識してもらうことで、さまざまな対応も可能になってくると思います。

現在、王滝口登山道で入山規制をかけているのが九合目。第一段階として王滝頂上まで安全施設を整備して入山できるようにしたいです。その次の段階として剣ヶ峰まで登れるように。ただ被災した施設の撤去だけでも億という費用がかかり、単年度では難しいものがあります。数年かかりますがハード面、ソフト面あわせて進めていきます。

また御嶽山火山マイスターの活動についても、個々の方々に活動を任せていますが、「御嶽山は火山である」ということの啓発と、御嶽山がもたらしてくれる自然の恵みや歴史、文化を含めて内外の人に伝えてほしいです。いままでも土の中のことは専門家でないとう理解できなかったのですが、一般の人にもわかるように伝えてもらえるとうありがたいと思っています。

大事なことは、正しく知って、正しく恐れること。山にもっと関心を払い、噴火を忘れないように木曾町とも連携をとっていきたいです。